

3. リスク情報利用拡大における障害 セッション1 PRAモデルの信頼性を確かなものにする —定期的に更新されるPRAモデルとデータの 信頼性を保つには何が必要か？—

座長 佐藤 拓

原子力エネルギー協議会(ATENA) 理事

2024年11月12日

原子力リスク研究センター ワークショップ2024
—意思決定におけるリスク情報の活用: 利点と障害—

セッション1 PRAモデルの信頼性を確かなものにする

—定期的に更新されるPRAモデルとデータの信頼性を保つには何が必要か？—

➤ 背景

- 過去、日本のPRAモデルに対して、内的事象の炉心損傷頻度の値が過小であること、国内機器故障率データの整備などの問題点が国外専門家などから指摘されていた。
- 福島第一原子力発電所事故後、NRRCが主導した産業界の取り組みでは、パイロットプラントが海外専門家レビューを受け、PRAモデルは改善が進められ海外事例に比肩できる水準に近づきつつある。加えて、改善に係る知見は、他事業者に水平展開されている。
- また、原子力規制検査における安全重要度決定プロセス用のPRAモデル(内的事象)も同じく改善が図られたものであり、再稼働プラントから順次、原子力規制庁によるモデルの適切性確認が進んでいる。

セッション1 PRAモデルの信頼性を確かなものにする

—定期的に更新されるPRAモデルとデータの信頼性を保つには何が必要か？—

➤ 課題認識とセッションの目的

- 国内PRAモデルはデータと共に国際的な慣行に比肩しうる“State-of-the-practice”の水準に達しつつある一方で、過去の日本のPSAに対する評判は、依然払拭されていない。
- 今後のリスク情報適用範囲の拡大に向けた、「PRAの信頼性に確信を与えることに関する課題・障害は何か？」を探り出す。

セッション1 PRAモデルの信頼性を確かなものにする

—定期的に更新されるPRAモデルとデータの信頼性を保つには何が必要か？—

➤ 本セッションの構成

- a. 導入(座長):5分
- b-1. 伊方3号機におけるPRAの高度化について
～PRAの高度化とCDFの変遷～(四国電力 香川 明彦):20分
- b-2. 日本のPRA用機器故障率データ
(NRRC 吉田 智朗):20分
- b-3. 事業者のPRAモデルの適切性確認の現状と規制側の期待
(原子力規制庁 米林 賢二):20分
- c. 質疑応答と議論:50分